

知床で会った若い二人



羅臼岳山頂よりオホーツク海を望む。一瞬の晴れ間に歓声上がる。

今年の夏七月に知床の山を山岳会の仲間と登った。斜里岳も羅臼岳もあいにくの天気  
で頂上からの展望は残念という他なかったが、それでも羅臼岳では時折雲間からオホー  
ツクの海を望むことができた。

山を下りて知床半島の東海岸を、最先端の集落が尽きるところまで車を走らせた。車  
窓の右側、水平線に国後島が長々と横たわっていた。国後島がこれほど近くにあるとは、  
実際に見て初めて知った。曇った空の下にその島はいつまでも車の視界から消えること  
はなかった。

国道の終点に目当ての相泊温泉があった。「…温泉」と聞くと温泉旅館が立ち並ぶ歓  
楽街をつい思い浮かべがちだが、ここの「温泉」は、道からコンクリートの階段を海岸  
まで下りると、二×三メートルくらいの浴槽が浜にくり抜かれたようにたったひとつだ  
けある、百パーセント天然のお風呂である。屋根も側壁もブルーシートで、それだけが  
外界を遮断している。腰ほどの深さの温泉は、底のある一箇所から時々熱いお湯を吹き  
出していて、そこだけ注意が必要だった。

一人だけ先客があった。私は日焼けしたその青年に話しかける。

「仕事ですか」

「自転車で回っています」

「だいぶになりますか」

彼は大阪を出て北海道まで二ヶ月かけてやってきたこと、学生ではなく仕事を辞めて旅に出たことを話してくれた。大阪で働いているとき、同僚に、阪神の川藤と同じ高校出身の人が三人いたというので、わたしは思わず「それは私の高校、若狭高校だ」と叫んでしまう。全く世界は狭いのである。

女風呂がちょうど背中合わせの形であり、彼はそこにいる誰か向かって声をかけていた。一緒に旅をしているガールフレンドであることを風呂から上がって聞いた。

彼女は北海道までフェリーで来て、彼と合流して今一緒に旅行している。貧乏旅行なので、二日に一度買い物をして青年が料理、女の子はそれ以外のことをして旅を続けている。寝るのはたいてい野宿、これから北海道を回って最終目的地は沖縄だという。

立派なデジタルカメラを持っていたので、長旅ともなるとカメラのメモリーだけではすぐにいっぱいになるのでないかと思い、パソコン持参の旅かと訊くと、「これです、

これに入れていきます」と見せてもらったのは、大容量の音楽用プレーヤだった。音楽も聴けるし写真も納めることが出来る。便利なものがあるのをあらためて知る。

私は何ヶ月もかけて旅行したことはないので、旅が生活であるような毎日がどんなかは正確にはわからないが、楽なことばかりでないだろう、元気で病気をせずにいる人からいろんな話を聞いて無事旅を終えてほしいと心から思った。

これまで行ったことのないところに行きたくなって旅に出る。行く先々にはそこで生活している人たちがいるのだから、特別なことは何もないともいえる。それでも誰にも頼らず長い旅をしている若い人を見ると応援したくなる。

二台並んだ自転車の青年のほうの荷台にはたくさん荷物の上に乗つぶしたタイヤが一本、しっかりと縛り付けてあった。長旅の戦利品のようであった。

(二〇〇六年九月五日)